

## 「なり」の識別 確認テスト（古典文法） 解答・解説

### ■ 解答・解説

問1 断定の助動詞「なり」。根拠＝直前の「王」が体言（名詞）であり、体言に接続する「なり」は断定。訳「私こそがこの国の王である」。

問2 イ（伝聞・推定の助動詞）。直前「聞こゆ」は下二段動詞の終止形で、終止形＋「なり」は伝聞・推定。しかも「笛の音」という音声根拠になっている。

問3 「聞こゆ」は終止形であり、音声（笛の音）を根拠とするので伝聞・推定の助動詞。訳例「笛の音が山の方から聞こえてくるようだ（聞こえるという）」。

問4 動詞「成る」の連用形。終止形（基本形）は「成る」（ラ行四段）。「大木となりぬ」＝「大木になってしまった」。完了「ぬ」に連なる連用形であることも手がかかり。

問5 形容動詞ナリ活用の終止形活用語尾。「あはれなり」で一語の形容動詞であり、「なり」はその一部（助動詞ではない）。訳「たいそう趣深い」。

問6 断定の助動詞「なり」。直前の「女」は体言（名詞）。訳「あの人は心やさしい女だ」。

問7 ア（断定）。直前「する」はサ変動詞の連体形。連体形＋「なり」で断定。なお冒頭「すなる」の「なる」は終止形「す」＋伝聞推定で、対比に注意。

問8 訳例「男も書くという日記というものを、女（の私）も書いてみようと思って、書くのだ。」（最後の「なり」は連体形「する」に付く断定。『土佐日記』冒頭を踏まえた学習用改変）。

問9 動詞「鳴る」の連用形。品詞は動詞（ラ行四段）、活用形は連用形（下に「て」が続く）。「夜もすながら鳴りて」＝「一晩中鳴って」。

問10 伝聞・推定の助動詞。直前「聞こゆ」は終止形に接続。水の音という音声根拠であり、「聞こゆなり」＝「聞こえてくるようだ」。

問11 断定の助動詞「なり」。直前の「しるし」は体言（名詞）で、体言＋「なり」は断定。訳「この花が咲くのは、ほんとうに春のしるしであったなあ」。

問12 伝聞・推定の助動詞。「吹く」はカ行四段動詞の終止形。終止形＋「なり」で伝聞・推定（風の音という音声根拠）。訳「沖の風が激しく吹いているようだ、舟を出すな」。

問13 形容動詞ナリ活用「静かなり」の終止形活用語尾。語全体の品詞は形容動詞、活用の種類はナリ活用。「なり」だけを助動詞と見誤らないこと。訳「たいそう静かだ」。

問14 (1) 動詞「成る」の連用形。直前「人に」の格助詞「に」＋「なり」で「(高德の) 人におなりになった」と変化を表す。助動詞ではない点に注意。(2) 終止形（基本形）は「成る」（ラ行四段）。

問15 形容動詞ではなく、ここでは「鳴き」＝動詞の一部。「ねず鳴き」で「ねずみの鳴きまね（チューチュー鳴くこと）」を表す名詞的なまとまりで、「鳴き」は動詞「鳴く」の連用形が含まれる語。助動詞「なり」ではない。『枕草子』を踏まえた学習用例。

問16 断定の助動詞「なり」。直前「宿」は体言（名詞）なので断定。訳「訪ねて来る人もない宿であったなあ」。

---

問17 伝聞・推定の助動詞。「降る」はラ行四段動詞の終止形に接続。さらに「人の語りき」とあり、人づての情報（伝聞）が根拠なので伝聞・推定。訳「都では今ごろ雪が降っているというと、人が語った」。

---

問18 伝聞・推定の助動詞。直前「名所」は体言だが、ここは「名所なり」＝断定「名所だ」に、引用の「と」＋「聞く」が付いた形で、傍線部「なり」自体は体言＋なり＝断定。文末「と聞く」が伝聞を別に表している点に注意。訳「あの山は紅葉の名所だと聞いている」。※「なり」単体は断定が正答。

---

問19 断定の助動詞であるもの：① ⑤ ⑥（＝⑥の文末「なり」） ⑨ ⑭ ⑯。（いずれも直前が体言または連体形・体言相当）

---

問20 伝聞・推定の助動詞であるもの：② ⑧ ⑩ ⑮。（いずれも直前が終止形で、音声や伝聞が根拠）

---

問21 見分けの中心は接続。直前が体言または連体形なら断定（「～だ・である」）、直前が終止形（ラ変型は連体形）なら伝聞・推定（「～という・～ようだ」）。まず傍線部の直前の語が何形かを確認するのが第一歩。

---

問22 伝聞・推定の「なり」は、音声・物音や人づての情報を根拠として「～のようだ・～という（のが聞こえる）」と、話し手が直接見えていない事柄を推し量って述べる点に特徴がある。

---